令和５年 ７ 月 ２５ 日

令和５年度 総務経済委員会 行政視察報告書

伊豆市議会総務経済委員会 浅田藤二

震災復興後のまちづくり

日時 令和５年 ７ 月 12 日(水) ～ ７ 月 14 日(金) 3 日間

① ７ 月 12 日（水）11：10 ～ 12：10 宮城県東松島市

津波にのみ込まれた旧野蒜駅

復興支援に派遣された伊豆市飯田主幹と

同じ職場で働いた皆さんが説明してくれた

② ７ 月 12 日（水）13：10 ～ 13：50 東松島市震災復興伝承館

飯田主幹の名前がある。誇らしい

被災者を中心とした市民 800 人の雇用を

実現したリサイクル事業(東松島方式)

東松島市では、 死者 1,110 人 行方不明 23 人

復興まちづくり計画 ＋ 環境未来都市構想 ＝ 持続的に発展する東松島市の実現

a）住民自らが望んだ「安全な集団移転地」

b）コミュニティごと移転できる「地域の絆を重視した集団移転地」

c）公共交通が至便「JR 駅近く」「持続的に生活できる集団移転地」

↓

市街化区域をコンパクトにし、かつコミュニティを維持した集団移転地選定

↓

地域活性化(地方分権の具現化)　＝　新しい自治(地域内分権)

10 年後も安心して暮らせる地域でいられるか

↓

「協働のまちづくり」

「東松島方式」災害廃棄物のリサイクル

↓

混ぜれば　ゴミ　分ければ　資源

被災者を中心とした市民 800 人の雇用を実現

災害が発生してからではなく、事前の対策と準備が重要

↓

SDGs 未来都市宣言

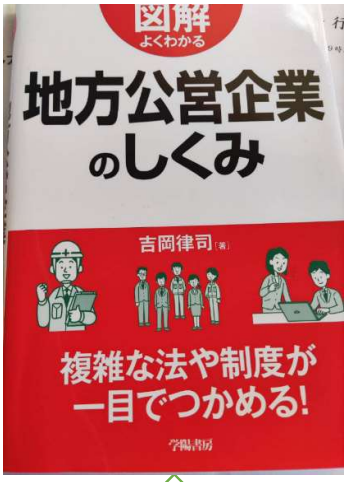
矢巾町の住民参加とフューチャーデザインの取り組み

フューチャーデザインによる水道料金の改定について

③7 月 13 日（木）　9：00　～　10：00　岩手県矢巾町

蛇口をひねれば、水が飲める。

そんな当たり前のことが、当たり前ではないことを住民に理解してもらうにはどうしたらいいのか。事業実施にあたり山積する行政課題を住民とともに考え、市民サービスにつなげていくフューチャーデザインによる課題解決の手法を学んだ。



説明者　吉岡課長の書

知　　識

知らせる　→　参加　→　信　　頼　→　合意形成

道徳意識

水道事業は、住民の日常生活に欠くことのできないインフラであり、公衆衛生の向上等の点からも極めて公共性の高い事業。

課題		課題解決の方向性
人口減少に伴う料金収入減少 施設の老朽化に伴う大量更新 耐震化等の災害対策	財源確保 アセットマネージメントの精度向上	地域の状況に応じた**広域化**の検討 **民間**企業が有する優れた技術やノウハウの積極的な**活用**
人　材　不　足 新技術の登場	技術・ノウハウ継承と人材育成	経営戦略の策定等による**組織的な取り組み** 事業課題を解決できる**人材育成**
住民の低料金を望む意識	住民とのコミュニケーション機会の充実	

震災復興後の持続可能な観光地づくり

④ 7 月 13 日（木）　13：00　～　14：00　釜石市(かまいし DMC 事務所)

釜石市の観光コンセプト

オープン・フィールド・ミュージアム（OMF）屋根のない博物館

～　人に会いに行く観光　～

津波の高さ

ラクビーの町

釜石の漁港

地域の文化・自然・施設・住まう人々・生業を「展示物」と見立て、教育旅行や企業研修・ワーケーションの受け入れを促進している。

・人や生業を展示物として観光の中心に 20 以上の体験プログラムを年間を通じて常設、コンテンツ化している。

・サスティナブル・ツーリズム　GSTC(世界持続可能観光協議会)基準

・地域の多くの関係者にメリットがある「三方よし」の展示作品の開発・造成

・体験時間に配慮し、宿泊につながるコンテンツの造成。

・高付加価値の企業版ワーケーションと研修プログラムを実施して、消費額が向上。

↓

伊豆市の DMO が、実施している体験プログラムに環境改善につながるものや、持続可能な未来につながる要素を入れることがたいへん重要だと感じた。

「2023 年に行くべき５２ケ所」に選ばれた町づくり

⑤　7 月 14　日（金）　9：00　～　10：00　盛岡市役所

令和５年１月にニューヨーク・タイムズ紙で「2023 年に行くべき５２ケ所」の２番目に盛岡市が紹介される。

街なかに花壇が多くボランティアが活躍

・デジタル観光マップの作成。10 ヶ国語対応。

・盛岡 City　WiFi　32 ヶ所の整備

・6 千万円の追加補正。

・ニューヨークへさんさ踊りとわんこそばを派遣し、岩手・盛岡の魅力を発信。

・外国人観光客の増加が顕著。

ハンギングバスケットが飾られる

多言語のサイン

⑥　7 月 14　日（金）　10：30　～　12：00

盛岡ふるさとガイドによる市内視察

古い建物が活かされている

記事を書いたニューヨークタイムズのクレイグ・モッド記者は、「ありのままの盛岡にしてほしい。何もしなくていい。」と観光担当者に伝えているそうです。何気ない日常が、盛岡の魅力だと感じました。

旅の印象は、人の印象だといいます。盛岡の駅から、盛岡市役所まで職員の皆さまや花壇を整えるボランティアの皆さまからおもてなしの気持ちが伝わってきました。これこそが、ニューヨークタイムズのクレイグ・モッド記者が世界に盛岡の魅力を伝えたかった理由だと思います。

まとめ

人のちから、人の魅力が観光振興や地域活性化につながるとあらためて強く感じる研修となりました。

東松島市では、復興支援に派遣された伊豆市飯田主幹の活躍が説明してくれた職員の皆さまから伝わり、そのつながりが誇らしくこれからの交流を大切にしていきたいと感じています。

矢巾町では、吉岡律司政策推進監経歴に感動しました。水道課に 20 年勤務し、業務の課題解決をめざし、大学で博士号を取得。水道ビジョンや総合計画の作成の中心職員として活躍していました。

釜石市では、建物や景色ではなく、「人に会いに行く観光」という言葉が印象的でした。

盛岡市では、何気ないおもてなしの心が伝わってきて、それがとても心地良く、課長が説明された「旅の印象は、人の印象」という言葉に納得がいきました。

課題解決に直面したときに、人材育成、人材確保が非常に大切になってくると感じています。そして、「仕事は人だよ」「人が財産だ」の言葉を思い出しています。